

3 片口状の甕について

H-20号住居址出土の片口状の甕について、以下に若干の考察を加えてみたい。

まずこの甕は先の項で述べたように、第Ⅰ段階6世紀前半に位置する。嶺・下原遺跡の中で当時期に位置する住居址はH-20号住居址のみである。出土遺物はカマド周辺から集中的に出土しているが、他の住居址と比べると出土量は少ない。また、甕の出土も数点で、片口状の甕の出土は1点のみである。

次に口縁部の形状を細かく観てみたい。

口縁部は6世紀前半の時期の甕として標準的な形態を示し、口唇部に片口を持つ以外特に変わった部分はない。さて口唇部の片口であるが、第37図の実測図を見たとおり甕全体の大きさからみて、小さな片口である。

ここでこの片口について、①単に成形上の失敗 ②機能を考えての製作。と言う2つの見解が考えられると思う。まず①の場合、土器全体からみて片口が小さすぎて実際に機能すると考えにくいため、単に成形上の失敗と考えられる。②の場合、他にこの様な片口状の口唇部を持つ甕の類例がないため、この様な成形上の失敗をそのままに土器を作ってしまうと考えにくい事また、小さいとは言えこの片口でも機能すると考えられる。

次に片口部分の状態を観察すると、口唇部は丸く丁寧に成形されているが、片口部分については、口唇部が徐々に平らになり、籠状の工具で押さえて作り出している様に見える。この様に片口の部分の状態からすると意識的に作り出された可能性が考えられる。では実際にこの程度の小さな片口が、液体を注ぎ出すときに役に立つかどうかを考えたい。これを考える上で1番速いのは実際に甕の中に液体を入れ注いでみる事であろう。甕の中に水を入れ注いでみた。結果水は注ぎ口に集まり、きれいに流れ出た。注ぐ事に対しては十分対応できたのである。考えてみると現在の私たちの生活の中にも、この甕と似た様な物がある。それはコーヒーのサーバーである。コーヒーサーバー内のコーヒーをカップに注ぎ分けるのだが、その注ぎ口はサーバー全体の大きさからみて非常に小さい、しかししっかりとその機能を果たしている。この甕は口縁部の形状、口唇部の形状がコーヒーサーバーのそれと非常に似ている。

以上のような事から、この甕の片口はその機能を考えた上で意識的に作られた物と考えたい。また、土師器の甕でこの様な片口を持つ物は私の知る限り他に類例がない。単に嶺・下原遺跡の集落内のある人間の知恵として作られたのか、地域的な特色なのか、今後土師器甕の口唇部を注意深く観てゆきたい。